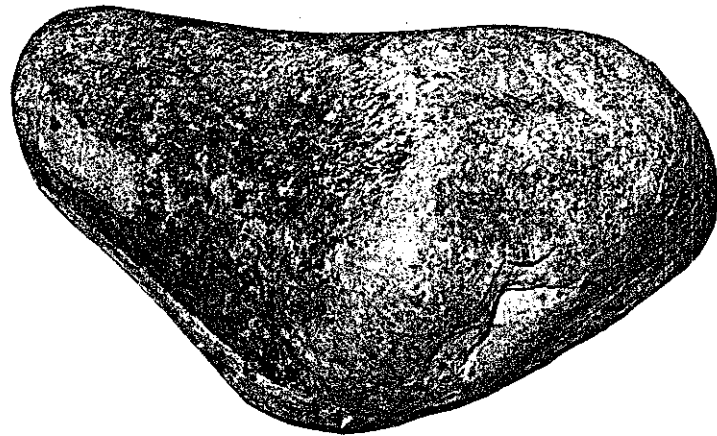


美保関隕石騒動

顛末記



松江天文同好会 事務局 編

「美保関隕石騒動顛末記」の発行にあたって

平成4年の年末に落下した、美保関隕石はその年の天文界のビッグニュースとなりました。松江天文同好会ではこの事件を記録すべく日記の形をとって顛末記を書いてみました。当時の緊張した雰囲気少しでも味わって頂ければ幸いに思います。

尚、当時は複数の天文団体がネットワークを組んで活動しましたが、ここでは同好会の動きを中心に記述してあることをご了承下さい。

注 本品は食べられません

プロローグ　そして空から落ちてきた

12月の初旬、山陰地方は激しい雨と風そして雷に見舞われる天気となる日がある。大体そのあとから雪の日が多くなるので、それは『雪起こし』と呼ばれている。

12月10日午後9時

当直明けの疲れた体を横にして、2才になる娘を寝かしつけながら私はまどろみ始めていた。外は相変わらず風が吹き荒れ、みぞれ混じりの雨が窓を叩いた。時折閃光が走り雷鳴が大地を揺さぶった。

不意に風雨と雷が止み一瞬の静寂が訪れたとき、私は誰かの叫び声を聞いたような気がして目を開いた。

こんな嵐の夜に一体何だろうと考えるうち、再び強まった風雨と雷の中で睡魔に捕らわれた私は深い眠りの淵に落ちていった……

そして　それは空から落ちてきた

美保関隕石騒動顛末記

第1章 松江天文同好会の24時間

12月12日 午後5時

「今日電気屋に注文したファンヒーターはまだ届かないだろうか？」などと思いながら私は自宅でのんびりしていた。11月中は比較的穏やかな天候であったが、今月に入り低い雲が垂れ込める山陰地方特有の冬の様相を見せ始めていた。

電話が鳴ったのはその時である。我が松江天文同好会の会長の安部さんだ。開口一番『美保関で隕石が家に落ちたそうです。どうやら12月10日の事らしい。日原の斎藤さんから今連絡が入りました。』聞きながら体が震えてくるのが自分でも分かった。いつの間にか電話の向こうで聞こえる声を大声で復唱している。『向こうのお宅には訪問の了解をとりました。これから一緒に向かいましょう。隕石は6.5 μ くらいあるらしい。結構大きいですよ。』興奮を一生懸命おさえながら集合場所や時間の打合せをすませ、すぐに出発準備をする。

午後7時30分

市内で会員の馬淵君と合流して出発、松江市から美保関町までは約25 μ ある。前を走る路線バスにイライラしながら一路美保関町へ向かう。体の震えがまだ止まらない。

午後8時30分

美保関町内で集合、メンバーは松江天文同好会の安部会長、金津さん、馬淵君そして私（佐藤）米子星の会から池口さん、山陰天文協会から山田さん太田さんの計7名であった。ここで当夜の松江天文同好会のメンバーを紹介しておく。

会長の安部裕史氏～松江天文同好会の中心的存在、八束町在住、ミカゲの26センチで小惑星の搜索をしている。同好会唯一の「ハイアマチュア」である。

金津和義氏～役職は無いが同好会の実質的な「副会長」であり、その沈着冷静な性格は会員の信頼が厚い。今回の事件では彼のパソコン通信が大いに力を発揮した。

馬淵俊之君～最近同好会に入会した若手のホープ、実は彼は某朝日新聞の記者である。マスコミに騒がれすぎるのは本意では無いが、天文ファンの彼ならそれなりの対応ができるだろうとの事務局の判断で同行。

私（佐藤寧志）～同好会の事務局をつとめる地方公務員、天体観測技術、写真技術、共に見るべき物無し、下品な冗談で若い会員の尊敬を集めている。（その内容は「発禁」の

恐れがあるのであまり書けない)

午後9時

美保関町惣津(そうづ)の松本 優さんのお宅に到着、隕石が落ちた問題の家である。美保関町は島根半島の一番東に位置する町で、民謡「関の五本松」で有名な所だ。松本さんのお宅がある惣津地区は隠岐航路の七類港(しちるい)から車で5分、日本海に面した場所にあり海岸沿いに民家が立ち並んでいる典型的な漁村のたたずまいである。

お宅を訪ねて松本さん夫妻に夜分訪ねてきた非礼を詫びつつ上がらせてもらう。松本さんのご主人は隣の鳥取県米子市の電気設備会社に勤務される営業所長さん、御夫婦共に非常に温和な方で我々の矢継ぎ早の質問にも丁寧に答えて頂いた。

問題の隕石は一階の居間にあり、部屋は畳が上げられ積んだ畳の上にその隕石は乗せられていた。部屋は天井が破られるやら、障子の棧が折れるやら、まるで家の中を台風が通った後の様だ。

石は長さ24センチ紡錘形をしており太い所で14センチ×12センチ程度の大きさ、重さは松本さんによれば6.5キロ位とのことだ。色は灰褐色、黒こげの石を想像していた我々はその白さに正直少し戸惑った。(後で判ったことだが隕石が屋根や床を突き破ったときに表面のオコゲがはがれたらしい。)

我々はさっそく隕石や壊された家の状況を写真に収め始めた。落下の時の状況は新聞等で詳しく報道されたのでここでは省略するが、二階の屋根を破り(瓦4枚破損)、二階の天井、二階の床(カーペット)、一階の天井と次々と破っていき、一階床の畳をはね上げて床板を破り落ちたらしい。恐らく凄惨な音がして、家の人は驚かれたことだろう。後でマスコミの取材に答えた松本さんの奥さんは「冷蔵庫が落ちてきた様な音がした。」と表現されていた。私はあまり冷蔵庫を落とした事が無いが何となく判るような気がした。

写真を撮り、落ちたときの状況を詳しく聞いて、同好会の安部会長と山陰天文協会の山田さんが中心となり今回の事態を松本さんに説明する。その内容は

1. 問題の石は専門家の鑑定を待たなければならないが「石質隕石」の可能性が非常に高い
2. これが隕石であるとすれば、日本に落下した隕石の中でも大きな部類に入るだろう。
3. さらに民家の屋根を破って落ちた隕石は世界でも極めて珍しい。
4. いずれ村山定男先生をはじめ専門家が調査に訪れるだろうから、石は大切に保存願いたい。
5. 明日はおそらくマスコミの取材で大騒ぎになるだろう。等々

松本さんも事態の重要さに少し驚いたご様子だった。今後の打合せを終えて松本さんのお宅を辞したときは既に11時を回っていた。それぞれが家路につく。

12月13日午前0時30分

金津さんのお宅へ行き、早速パソコン通信で全国に知らせ、同時に火球情報の提供を依頼する。同様の情報が日原文台の斎藤君からも一歩先にはいていた。終了は午前1時30分、家に帰り風呂に入り床に着くもなかなか寝付けない。

12月13日午前8時

朝から電話で同好会のメンバーにこの事件を連絡、この日隕石捜索が有るかも知れないので人集めにかかる。しかし、昨夜飲み過ぎて起きれない奴、デートの約束があり既に家を出ている奴・・・なかなか皆に連絡が付かない。やっとのことで専門学生 of M君、大学生のWさんに連絡が付き、車に乗せて現地に向かう。ちなみに松江市から美保関町へ向かう道には〇〇ホテルがとっても多い。世紀の大発見に興奮気味の二人の緊張をほぐそうと私はそれらの建物をゆびさしながら『君と僕がここに入れば、これがほんとのインセキ関係！』等と軽いジョークを飛ばす。助手席のM君は笑い転げ、後席のWさんは白い目で私を見る。・・・同好会の運営はとてもむづかしい。

午前10時

町内の集合場所から現地に向かう。聞けば安部会長の自宅には夜明けまでマスコミから電話取材があったとの事、やはり大変な騒ぎになっている。

現地到着・・・断続的な雨と風、まるで隕石が落ちた日の夜のような天気である。続々昨夜のメンバーに加え連絡を受けた天文ファンが集まる。松本さんの家の中は大勢のマスコミ、テレビカメラ、天文ファン加えて近所の人で收拾が着かない状態であった。聞けば未明にも某NHKが取材に来て、松本さん夫妻は殆ど寝ていないとの事であったが、その日もマスコミ関係の質問に丁寧に答えておられた。純朴な島根県人を代表するようなお二人には頭が下がる思いである。

東京国際大学教授の「島 誠」博士と国立科学博物館「島 正子」研究室長ご夫妻が見えられて、問題の隕石を鑑定する。お二人の見解は『典型的な球粒隕石（石質隕石の一種）の特徴を示している。80パーセントは隕石だと思うが、あとは詳しい分析をしないと断定できない。』・・・さすがはプロの学者らしく冷静で慎重な態度である。

マスコミはと言えば、島夫妻や松本さんに群がり必死に話を聞き、揚げ句の果ては我々にまでインタビューを始める。後日談になるが、この時同好会の金津さんもインタビューを受けていたが、それが夕方のテレビに登場した。実は彼はあるテレビ局に勤務している。悪いことに、放映されたのは金津さんが勤務するテレビ局とは別のチャンネルであった。彼が社内で立場を失ったのは言うまでもない。

午前11時30分

松本さんのご主人、島夫妻、そして地元天文ファンとの話し合いがはじまる。その結果隕石は『美保関隕石』と命名することとなり、その日のうちに分析のため東京の国立科学博物館に持ち帰る事となる。分析には1か月かかるとの事であるが、なるべく早くレプリカを作って松本さんへ届ける事で合意が成立、続いて記者会見の準備打合せに入る。

午後1時

記者会見が隕石が落下した一階の居間で始まる。出席者は松本さんのご主人、島 正子研究室長、同好会の安部会長、山陰天文協会の山田 義弘さんの4名。午後1時30分頃終了し報道陣が引き揚げ始めやっと少し静かになる。

続いて隕石搜索の協議にはいる。搜索会は12月23日(天皇誕生日)に行う事にし、各アマチュア団体から関係機関等に協力を求める事とする。搜索会の名称は『美保関隕石を探そう会』と決定。

この時点まで風雨が強く、皆、騒ぎに疲れてしまい、この日の搜索より人員を揃え大掛かりにする方が良いと考えた結果である。

午後2時30分

現地解散して松江市内に帰る。私と金津さんそしてM君、Wさんの4名は喫茶店に入り、食事。寒さと空腹で疲れきっていたが、やっと人心地が着く。

打合せを終えて解散したのは午後5時、家路に着く。空を見上げると相変わらず冬の冷たい雨が降り続いていた。隕石落下の知らせがあってから24時間、地球はその長い歴史の中で一回くると自転しただけである。これで終わった訳ではない。大変な事件が今始まったところである。もちろん我々の騒ぎをよそに地球は退屈な回転を続けるだろう、毎日いくつかの隕石をその身に受けながら……

第1章あとがき

美保関隕石の落下は、92年の天文現象の中でもおそらくトップクラスの事件になると思います。それだけに、我々としてもこの24時間は大変な緊張感を伴いました。

同好会員は皆それぞれに仕事を持っており、自由になる時間もそれほど多くはありません。それでも会員それぞれが頑張っていました。

第2章 空白地帯に人が集う

12月14日午前10時

パソコン通信をしている安部会長の元には続々と火球情報が集まっているらしい。職場へ電話すると少々声が疲れている。美保関町役場にも火球情報が入っていたので日原の齋藤君へ連絡すると既に全国から20数件集まっているとの事、今夜あたりから確認作業に入るらしい。私は仕事が手につかない。

午後6時

仕事が終わって同好会員や県外のOB会員に葉書を出す。火球情報の収集と23日の隕石搜索会の連絡である。

12月15日午後1時

安部会長から電話『17日午前11時45分米子空港着の飛行機で村山定男先生が来られます。松江に一泊される予定です。』本当は13日に来たかったのだが家庭の事情で遅れたそう。

安部会長の声はますますグロッキーになっていく。おそらく同じくパソコン通信をしている金津さん、日原天文台の齋藤君、さらに全体の窓口になっている山陰天文協会の山田さんも同じ状態だろう。私は幸か不幸かパソコン通信をしていない。

12月16日午後6時30分

この日は松江天文同好会の例会である。同好会では月2回市内の公民館で例会を開き情報交換をしている。この日は8名が集合、これまでの状況を説明し、今後の予定について打合せをする。金津さんからパソコン通信の出力を見せてもらうと各地から色々な情報が入っていた。情報の集約先を巡って混乱も起き始めているようだ。この件に関しては複数のアマチュア団体がネットワークを組んでいるためこういう事も起こるのだろう。

この『顛末記』の第1章の下書きが出来たのでみんなに見てもらう。おおむね好評で少しホッとす。記録を残す必要性を誰もが考えていたらしい。ただひとり『13日朝、昨夜飲み過ぎて起きれなかった・・・』と書かれたN君だけが「僕の事は書かないでくれー」と哀願するも、私は聞く耳を持たない！記録は正確であるべきだ。

12月17日午前11時30分

米子空港に山陰の天文ファンを中心に15名程度が集合、この日は松江市内を出る時は

薄日が差していたものの、空港に着いた頃には冷たい雨が降り始めた。同好会からは安部会長、金津さん、そして年末のこのくそ忙しい時期に休暇を取って私が集合した。日原天文台からは斎藤君が来ており、最初の情報提供に厚くお礼を述べる。実は彼は高校時代の一年後輩で、いつもは「サイトー！」と呼び捨てにするが、今日は「斎藤君♡」と丁寧に話しかける。友達は大事にしたいもんだ。

午後0時

予定より15分遅れて飛行機が到着、降りてきたのは村山定男先生、藤井 旭さん、さらに別便で来た日流研の藪 保男さんの3名、そうそうたるメンバーである。空港のレストランで食事、さっそく情報交換が始まる。

午後1時30分

空港から美保関町の松本さん方に向かう、この辺の地理に暗い人も居るのでアマチュア無線を持っている車が前後を押さえ、迷子が出るのを防ぐ。車8台の大名行列である。

午後1時45分

松本さん方に到着、既に大勢のマスコミが待っていた。同好会の馬淵君も今日は仕事である。雨は上がったものの低い雲が垂れ込める。

村山先生が松本さんのご主人と当時の状況について話を聞く、松本さんは発見当初から見るとかなり疲れが目立つ。無理もない、あれからマスコミの取材攻勢がすごく、ご家族全員大変だったろう。聞くところによるとかなりの金額を示して「隕石」を譲ってほしいという人もいたそうだ。一体何を考えているんだ！！

午後2時

村山先生を中心にして隕石が貫通した穴を検証する。ロープに重りを付け垂直線からずれを計り、進入角度を算出しようとするもので、その周りをテレビカメラが囲みこれまた大変な騒ぎである。

美保関町長が視察に訪れる。10分の予定が大幅にオーバーし自治体の関心の高さがうかがえる。

午後4時

松本さん宅の1階居間で天文ファンが村山先生や藪さんを囲んで記念撮影、そして情報交換と今後の打合せのため一行は松江市内に向かう。この頃再び雨が降り始めみぞれ混じりとなる。

午後5時

市内の公民館に集合、全員でそれぞれの火球目撃情報等を持ち寄り検討会が開かれる。地図を拡げ、情報を出し合うと隕石の経路が少しずつ見えてくる。安部会長の家は経路上にあり、落下地点から数キロ南である。『僕の所に落ちてくれれば・・・』悔しがることしきりである。

情報の確認については、各地の天文協会等に連絡網をもつ山陰天文協会の山田さんが受け持つこととなる。

藪さんは都合によりこの日に帰らなければならない。慌ただしくタクシーに乗り、松江駅に向かわれる。大変御世話になりました。

午後7時

市内の料亭（大衆割烹？）に集まり、懇親会。桜江の反田先生の音頭で乾杯の後全員が自己紹介。

村山先生、藤井 旭さんともに私達にとっては神様みたいな人で、思わず手を合わせておさいせんを・・・（もちろん冗談です）

お二人の言によると『山陰地方はアマチュア天文の空白地帯とおもっていた。こんなに天文ファンがいるとは思わなかった。ただ驚くばかりだ。』そうである。米子の池口さんが『山陰地方では10年近く前からアマチュアのネットワークがあり「Sun-in星の集い」という集まりもあり・・・』と説明する。お二人はただ関心するばかりである。

空白地帯と思われていた山陰にこれだけ人が集って話題になる事自体喜ぶべきことか、これまで知られていなかったのを悲しむべきことか。

私はといえば愛用のガイドスコープFC-50に藤井さんにイラストとサインをして貰い大はしゃぎ、これが35才のええ年をしたおっさんのすることか！！

午後9時30分

なんだかんだで盛り上がるがそろそろ時間となり、村山先生らと再会を約して解散。お二人は明日帰られるそう。我々も散々互々引き揚げる。これで私達も少し落ち着きそうで正直少しホッとす。

第2章あとがき

美保関隕石を巡る騒動も村山先生の調査をピークとしてすこし落ち着きを見せ始めました。マスコミの報道も一段落したようです。実は天文関係以外の雑音が聞こえ始めたのも

この頃です。最終的な隕石の落ち着き場所を巡って水面下で国や地方自治体の利害が絡み始めたという声も聞こえてきました。この手はお話は私が好まないし天文とは関係が無いので省略します。

第3章 石はどこに眠る

12月23日午後0時

今日は『美保関いん石を探そう会』の日である。朝から風が強く時々小雪が混じる。こんな日に人が来るのか？先日村山先生が来られた時「ウーン・・・これは形からして単独の隕石かな」とのつぶやきが耳をよぎる。

市内のいつもの公民館に行き、同好会員の集合を待つ。最初に来たのはWさん、上等のコンパスを持ってきた。何を隠そう彼女は大学の地質学科4年！石とそうでない物の区別が付くそうだ。次に来たのは『飲んだくれ』のN君、見ると顔がまだ赤く、息が酒臭い、夜明け近くまで飲んでいただけのこと。おいおい完全な飲酒運転だぞ！予定より15分遅れてHで元気なK嬢が到着する。

午後0時15分

『飲んだくれ』のN君にこの先運転させるわけにはいかない。私が彼の車を運転して4人で美保関町の集合場所へ向かう。

ちなみに松江市から美保関町へ向かう道には、ラブ〇〇〇がとても多い。私はみんなの緊張をほぐそうと『今日は寒いから帰りにあそこで風呂にでも入ろう』と気軽に話しかける。HなK嬢は笑いころげながら「賛成！賛成！」と喜び、Wさんは白い目で私をみる、N君は二日酔いのため反応がない。・・・同好会の運営に少し自信を失くす。

午後1時

待ち合わせ時間ちょうどに集合場所の七類（しちるい）港に到着、既に60～70人の人が集まっていた。それにしても今日もテレビカメラの数が多い。他に取材するもんが無いのかオメーらは！天文ファンは遠くは鳥取市からも来ていた。日原の斎藤君や郷原さんの顔も見える。一般の人は20人前後か？

午後1時30分

予定より少し遅れて安部会長が到着、山陰天文協会の山田さんと共に参加者に今日の説明が始まる。若干準備不足の感があるのはやむを得ない、皆この時期忘年会等で多忙なのだ。それでもなんとか班編成と地区割りが出てきて搜索にはいる。

午後2時

私の班が搜索する区域は例の松本さんのお宅から北方で小高い丘陵が広がっている。K

嬢の他に一般の参加者2名が私の班に入りさらに道案内に松本さんのご主人も加わり計6名だ。隣の班は二日酔いに悩むN君が班長だが、石とそうでない物の区別が付くというWさんが補佐役にいるので多分大丈夫だろう。

搜索区域に向かう途中、後ろからバイクで追いついてきた者がいた。同好会のM君である。聞けば午後1時30分に眼が覚めて飛んで来たとのこと、予定通りだ。6名で山道を登る、丘の中腹で更に3方向に分け搜索をするも、枯れ葉が多く普通の石さえ見えない。山中には途中で折れた松の木が多く、さては隕石雨で・・・と期待するが近づいて見ると折れた部分は少し古く、去年の台風19号の被害だろうとの結論。結局1時間余りの搜索でこれといった収穫もなく、中間報告のため集合場所に戻る。

午後3時15分

戻ってみると、平地を搜索した班は子供たちが多いいせいか、いろんな石コロを拾ってきていた。私などは変な石を拾ってきてみんなから『あの人、天文同好会の人なのに隕石と間違えて普通の石ひろってる〜』と言われたくないので軽はずみに石を拾えない。案外隕石が発見されとるしたら発見者は子供かも知れない。

ここで班を再編成して未調査地点に向かう、我々は海岸線を西に向け徒歩で搜索、冬の海水浴場に到着した。風が強く波が容赦無く押し寄せている、こんな風景もなかなかいいもんだがなんせ寒い。さっきから雪も降り始めた。N君はここらへんで二日酔いから立ち直り、石を入れるべきビニール袋に浜辺の空き缶等のゴミを入れ始める。清掃奉仕は良いことだが我々はそーゆーことをしに来たのではないのだ。結局ここでも成果は無く空しく引きあげる。

午後4時20分

搜索隊全員が集合地点に帰ってくる。各班とも石はいくつか持って帰ってきたもの目立った収穫は無いようだ。一般の人はほぼ帰ってしまい、マスコミも夕方のテレビに間に合わせようと慌ただしく帰っていく。天文ファンばかり約40名が次回の搜索会を約束し、記念撮影の後解散。ひたすら寒かった。

午後5時

隕石の落ちた家の前は日本海に面していて「玉結湾」（たまゆわん）言う小さな湾がある。次回の搜索会はダイバーの協力を得て海中を探す話の実現するかもしれない。すでに天文協会の山田さんに申し出があったそうだ。天文ファン10名くらいが協力を要請するため隣の米子市内にあるダイバーズ・ショップ「スペース・A」に向かう。名前からして協力してもらえそうである。聞けば店長さんは美保関町の出身とのこと。快く引き受けて

もらい捜索を1月の31日に行う事で相談がまとまった。

それにしても冬の真っ直中に海に入るとは、何という常識外れだ！しかし我々天文ファンも時として普通の人から見ると常識外れな行動は多い。お互い様かもしれないなあ。

午後7時

松江市に帰り喫茶店で同好会の仲間と合流、1月の例会日程、1月31日の捜索会の打合せを行い、解散。

第3章あとがき

第一回の『美保関いん石を探そう会』は見事に空振りに終わりました。もちろん隕石がそう簡単に見つかるはずはありません。我々もいつもは空を見ている者が一日地面を見て歩くなんて一生有るか無いかの経験で結構楽しめました。次の機会も無理せず気楽に参加したいと思います。

当日はかなり寒かったためか、一般の参加者の人が20人位と少し寂しかったのが気に掛かります。各種マスコミを使って広報していたのですが、やはり天候が響いたのでしょうか。それとも一般の人には「隕石を探す」ということがイマイチ分かりにくいのでしょうか。あらかじめ石を幾つか用意して、それを見つけて裏を見ると「当たり」なんて書いてあると結構おもしろいと思いますが・・・それじゃ宝探しか

美保関隕石騒動顛末記 2

第1章 隕石だ！！

12月26日午後3時

第1回の隕石捜索会が終わってやっと落ち着きを取り戻してきた土曜日、私は息子と散髪屋に行き帰ってきたところだった。

安部会長から電話が入る。「近くの喫茶店にいます。すぐ来てください！」隕石騒ぎも一段落しかけているとゆーのに一体この緊迫した声は何なんだ。会長からこういう電話がある時は大抵私を騒ぎに巻き込もうとする魂胆だ。きっとそうにちがいない

取りあえず指示どおりに家から車で5分の所にある喫茶店「北欧」に向かう。ここは同好会が例会の後いつも使う喫茶店である。

喫茶店の一番奥の席には会長と知らない男性が3人・・・聞くと地元新聞社の人2人と松江在住の船員さん（この人が田原隕石の所有者の皆尾さん）・・・そしてテーブルの上には無造作にこぶし大の石がひとつ・・・半分くらい黒こげの皮膜がついて中が白っぽい石・・・ゲゲ！これはもしやイ・ン・セ・キでは？

船の甲板に落ちたという史上殆ど例を見ない「田原隕石」との出会いはここから始まった。当日聞いた話を総合すると、

1. 隕石は平成3年3月頃、愛知県のトヨタ車の輸出専用港「田原港」の沖合に停泊中の自動車運搬船の後方甲板に落下した。
2. 第一発見者は松江の船員さん（皆尾さん）ではなくこの石も人からもらったものだという。他の破片は幾人かの船員さんが所有している。
3. 皆尾さんも隕石だと思って保管していたが、例の「美保関隕石」が大きなニュースになったことから自分の石も鑑定してもらうつもりで知り合いの新聞社の人に相談して新聞社が美保関隕石の騒ぎから松江天文同好会の安部会長の名前を覚えていて今日連絡を取った。

ということになる。

しかし美保関隕石を見ているとはいえ、安部会長も私も隕石に関してはシロートに近い。ましてや「鑑定」なんぞ出来るはずもない。困ったときの神頼み・・・じゃない村山先生。

安部会長が喫茶店から村山定男先生にすぐ電話を入ると幸いにも自宅でいらっしやるのがつかまった。電話で石の特徴を説明するとすべて隕石の特徴を満たしている。

どかかああ —— ん（頭のなかがパニックになった音）

隕石を見ながら安部会長と私は新聞社の取材を受ける。ちなみに隕石は85ミリ×65ミリ×50ミリ程の大きさで大気との摩擦で焼けた部分は墨を塗ったように真っ黒で、一部には船の甲板のものと見られる緑色の塗料らしきものも付着している。割れた表面は美保関隕石と良く似た球粒構造が見られ、キラキラ光る鉱物も有りルーペで見るととても美しい。重さは約430グラム、これは喫茶店からクッキングスケールを借りて計ったので保証の限りではないがこんなものだろう。我々は往々にして科学的態度に欠ける。そういえば美保関隕石の時はヘルスメーターで計ったっけ。こんないい加減なデーターを受け取る村山先生や島先生もさぞ迷惑だろうと思う。

打合せが終わって喫茶店を出たのは午後4時30分、明日の新聞が楽しみだ

27日午前10時

皆尾さんの自宅を訪問する。今日は地元紙が隕石のニュースをスクープしているため閑静な住宅街にある皆尾さんの家は報道陣でごった返している。美保関隕石の騒ぎの再現がまた始まった。記者連中も美保関隕石の騒ぎの時に見た顔ばかりで何となく親しみも出て来る。テレビカメラを見ても余り緊張しなくなった・・・マスコミ慣れした自分が恐いナンチャッテ。

金津さんも途中から来てくれて二人で皆尾さんに詳しい事情を聞くやら、写真を撮るやら、アラエッサッサー。全国に散らばっている破片の所有者の方の名前や住所等を確認、近畿地方から四国、九州に散らばっている。しかもほとんどの人は航海中であるのでマスコミが電話しても家族では訳が分からない。事態は複雑を極めていく。

皆尾さんご夫妻も訪問したマスコミ対応だけでなく電話でひっきりなしに取材が来るので休む暇もない。何と外電のロイターからも電話が入った。どうやら世界的なニュースになったらしい。隕石が船に落ちた記録は歴史上無くもないが、隕石そのものがちゃんと残っている例は今回が初めてだそうだ。

27日午後2時

午後からは安部会長や天文協会の山田さんも顔をみせ、皆尾さんからの聞き取り調査や今後の対応を協議する。午後6時頃になり、我々も皆尾さんのお宅を引き上げる。

28日午後

仕事納めが終わったあと昨日判明した事項について村山先生に連絡、日頃あまり使ったことのないファックスなるもので四苦八苦して書面を送る。

一方、天文協会の山田さんのほうは全国の天文協会に連絡、他の破片を持っている人に

ついて調査を始めているらしい。いつもながら迅速な行動力には感心する。それどころか年末に九州は長崎に直接出向いたそうだ。驚嘆するばかりである。

平成5年1月5日

東京から村山先生がおいでになる。安部会長や私は仕事の都合で出られないが、わざわざ日原天文台から斎藤君や郷原君が来てくれ先生を出迎えてくれるそうだ。天文仲間のネットワークはありがたい。

午後村山先生が皆尾さん宅を訪問、分析のため隕石を一月程借り受けたい旨を皆尾さんに伝えて了解をえる。実は村山先生が来られるまでに利害の絡んだ話がいろいろ皆尾さんの周辺にあったそうだが（美保関隕石でもそうだったが）先生がすんなり借り受ける事が出来たのはやはり先生ご自身のお人柄だろう。

5日午後7時

市内で村山先生を囲み天文ファンが歓談。我々もこんなに早く先生と再び杯を酌み交わすことになろうとは思わなかった。美保関隕石から1か月も経っていないのでメンバーもやたら気安くなってしまう。参加者のひとり馬淵君は村山先生を見るなり「わあ一本物だ動いてる」と叫び大爆笑。

二次会はスナックで更に盛り上がる、その内容を書くとき一部の関係者から叱られるので詳しく書かないが、村山先生が色紙を乱発したり、生涯数本しかすったことのない煙草を皆で寄ってたかって先生に吸わせたり、安部会長は店の女の子に・・・おっと！やはり書けません。

1月6日午前1時

二次会が盛大なうちにお開きになったので、わたしはとぼとぼ歩いて家路についた。一体これまでの騒ぎは何なんだろう。天文ファンとはいえミーハーでろくろく知識も実績もなく、ましてや隕石のことなんかほとんど知らなかったこの私までが騒ぎの渦中にいる。しかもこの騒ぎは天文の世界を越えて、社会的な注目の的になりつつある。相変わらず重い足取りで家路をたどりながら、少し空恐ろしさを感じ始めていた。

そしてその長い夢はまだまだ覚めなかった。

第1章あとがき

美保関隕石に続き田原隕石の発見には本当に驚きました。この頃隕石騒動もピークで地元の製菓業者は「美保関隕石まんじゅう」なる商品を発売して全国ニュースになったりしました。

第2章 隕石じゃない!

続けて二つの隕石が確認された山陰地方ではちょっとした「隕石ブーム」である。我が安部会長や山田さんの方には「この石は隕石では?」と言った問い合わせや持込みが数多く有るそうだ。聞けば日原天文台も同じ様な状態で、地元の大学に問い合わせる人もいるとのこと。

新聞で『美保関隕石に〇億円の値がついた』等とまことしやかに伝えられた事もあって「この隕石はいくらになりますか?」と云って石を持ち込む人もいるとか。そんなもの隕石じゃない!もうムチャクチャでござります。

そして騒ぎはもう少し続きます。

1月31日午前10時

この日は美保関隕石の海中捜索が行われた。当初予定されていたのは隕石が落ちた松本さんの家の目前に広がる玉結湾(たまゆわん)だったが、少し波が高いので場所を変更、数キロ東の七類港と決定された。

例によって安部会長と私が物見遊山にでかける。米子市にあるダイバーショップ「スペースA」のメンバー7~8名が多く報道陣の見守る中船で七類港の湾内に進み捜索を行う。1時間余り捜索の結果隕石らしい石は見つからなかったとのこと。冬の海に潜って寒さに震えるダイバー達のために地元の人達がおむすびとブタ汁をふるまう。私達もちゃっかりおこぼれにあずかる。

午後からは天文ファンで陸上捜索のを行うが、時折降る強い雨のためこれも早々に終了した。最後に松本さんのお宅へ行きレプリカをみせてもらったが、安部会長も私もこの頃少々疲れ気味で早めに帰宅。

後日談になるが、この海中捜索の様様取材したワイドショー番組が「〇億円の隕石を探しにダイバーが潜る」として全国放送した。とんでもない!彼らは郷土のためにボランティアで参加してくれたんだ!

2月9日、島先生が松江で美保関隕石の分析結果について記者会見、2月11日には村山先生や島先生が美保関町で講演会、そして美保関隕石の一般公開が始まる。聞けば5日間の公開期間に1万人以上の人が見に来たとのこと。私達同好会のメンバーも見物人のひとりとして一般公開に行く。松本さんの家に落ちた時に比べほこりを落してもらい立派なアクリルケースに入った隕石に久々に対面。隕石の側には二人のガードマンが立って目

を光らせている。美保関隕石はもう我々の手の届かない所へ行ってしまったようだ。隕石を前にエライヤッチャエライヤッチャと騒いでいた頃が懐かしい。

そんな感慨を抱きながら公開会場を後にする。

第3章 最後のミステリー

隕石騒動が加熱する中、我々同好会は一つのミステリーに遭遇していた。隕石か？と持ち込まれる石は皆尾さんから持ち込まれた「田原隕石」を除いて、大抵は一目で普通の石と判定されたが、最後まで判断が付かなかった石もあった。これからするお話はそんな不思議な石のお話だ。

その1 事件の発端

1月中旬のある夜中のこと、大きな音がして夫婦が目覚めた。家の周りを見回すが何も異常は発見できない。翌朝になって庭の一角に変な石が落ちていたのを家の人が発見した。

石は重さ約1.5キロの大きな部分とそこから割れた5～6個の小さな部分があり、表面は焦げたか溶けたように黒くなっていた。割れた部分は金属結晶と砂のようにポロポロくずれる鉱物で構成されている。球粒構造は無いし、磁石にも反応しない。嗅ぐと硫黄の様な臭いがする。この家の周辺には他にこんな石は見られない。

家の人は美保関隕石の報道からこれも隕石だと思い、いろんな関係機関を通じて結局同好会に持ち込まれ、安部会長と私と金津さんがこの石に取り組むことになった。

最初私達も色めき立った。偶然とはいえ第3の隕石が現れる可能性はゼロではない。何より状況証拠が普通の石で無いことを示している。

その2 我々の仮定

現地調査の結果ますます不思議な状況が出てきた。石が見つかった所は松江市内とはいえ山中の家であり、道の突き当たりだ。家の前の道はそこで終わり、道を利用する人はその家の関係者以外にはいない。付近を通過する他の車から落ちたという可能性は否定された。

発見された場所は、すぐ側に蔵や小屋がありそれらには当たった形跡はなく真上から落ちたものと思われる、しかしその場所にはクレーターらしき物はない。それでも結構な勢いで落ちたらしくその場所からは多くの数ミリ程度の破片が回収された。

ここで我々の立てた仮定はこうだ。

この石は隕石の可能性はある。家の横には山が有るが木が茂っていて落石の可能性はない。（落石とすれば先に位置関係からして家の屋根に当たる）むしろ隕石が裏山のどれか

の木に最初衝突して、大きくバウンド、勢いが弱められて家の庭に落ちたと考える方が妥当だ。家の人が聞いた音もおそらく木に当たったときのものだろう。これで全ての説明が付く。

その3 搜索

隕石だとすれば、そして裏山の木に当たっているとすれば裏山を搜索すればその石の他の部分が絶対にある。折れた大木が有るかもしれない。そう信じた我々は裏山の搜索をする事になった。しかし裏山は急勾配でしかも地面は枯れ木が積もって石は簡単に見つかりそうにない。

そこで我々の採った手段はなんと「犬」である！安部会長の知り合いで警察囑託犬のシェパードを持っている人がいるのでその人に頼んで石の持つ特有の硫黄の臭いを手掛かりに他の破片を捜すと言うのだ。隕石を犬が発見したという事例は歴史上あるのだろうか、なければこれが世界初だろうな。等とバカなことを考えながら現場に向かう。

犬が捜すと言っても、当然人間も山に入る。私も入ったが勾配がきつく、何とも歩きにくい。おまけにもう若くないせいか、体が言うことをきかない（35才の言うことか）。

結局、搜索の成果はゼロであった。二週間後に今度は同好会員を集めての搜索も行ったがそれも成果が得られなかった。

その4 分析

搜索と平行して分析にも着手した。もちろん分析が我々に出来る筈がない。それぞれの機関に依頼してその結果を待ったのだ。

放射線分析～我々も美保関隕石依頼、にわか勉強で隕石特有のアルミニウム26という放射性同位元素の存在を知っていた。これが検出されれば・・・と期待したが結局検出されなかった。

成分分析～分析の結果、問題の石は「黄鉄鉱石」と判定が出た。放射線分析と同様に隕石の可能性は否定された。

その5 結論

結論として「謎」だけが残った。状況証拠は隕石を肯定したが、物的証拠は隕石を否定している。そして我々はその追求をやめた。我々はプロではない、無理やり結論を出す必要もない。謎は謎として残しておいてもいいのではないか。

今もこの謎は我々の心の片隅に漂っている。

第4章 そして星空へ・・・

平成4年12月10日夜「雪起こし」の激しい雷雨の中、美保関町に隕石が落下してから3か月が経過した。

季節は低く雲が低く垂れ込める冬から徐々に春の息吹が感じられるようになり、梅の花も開き始めた。我々の周りも落ち着きを取戻し、マスコミからの取材も嘘のように来なくなった。静かな日々が戻り始めていた。

永い夢だった・・・我々にとっては本当に永い、そして思い出に残る夢だった。豊臣秀吉の辞世の句を借りれば「美保関隕石も夢のまた夢」となるだろうか。

そして我々は星空へ還る。
静かな日々の中で星空の下で乾杯し、星空の下で語り、星空の下で遊ぶ。

松江天文同好会、きままで、自由で、少しわがままな会員達の心の中には今も「夢」の記憶が静かに息づいている。

おわり

エピローグ 「ワタシハインセキ」

ワタシは眠ッテイタ。イツゴロカラ眠ッテイタノカ覚エテイナイ・・・気ノ遠クナルホド昔カラナノカ、ツイサッキカラナノカ・・・

「ワタシハモットネムッテイタイ」

突然体ガ何カニ引ッ張ラレタノヲ感ジテ私ハ眼ヲ覚マシタ。見ルト眼ノ前ニ青イ大キナ奴奴ガイタ。私ハ奴ニドンドン引ッ張ラレテイッタ。

抵抗スル事モ出来ズワタシノ体ハ青イ奴ノ体ヲ包ム気体ノ海へ落ちテイッタ。

「アツイ、カラダガアツイ、タスケテクレ」

ワタシノ体ハ炎ニ包マレテ・・・ワタシハ苦痛ニ叫ビ続ケタ・・・

タスケテクレ カラダガアツイ タスケテクレ

あ と が き

アマチュアの「分相応」について考える

民家の屋根を突き破った「美保関隕石」、そして船の上に落ちた「田原隕石」と二つの隕石の発見に天文ファンとして遭遇できたことは我々にとって非常にラッキーであったと同時に貴重な体験でした。

しかし、天文学的な興味とは別にこの山陰地方を中心にして別の動きが生じていました。いわゆる「隕石」の落ち着き先、活用法を巡っての各関係機関の綱引き、そして隕石の所有者に対する金銭的な物を含めた働きかけです。

私は、意図的にそれらの事実を「顛末記」から外しています。確かに美保関隕石が確認された当初は我々もマスコミのフィーバーに引きずられる形でこの騒ぎの渦中に身を投じました。

しかしながら、事態は我々の予想を大きく超え山陰地方に広がったのです。我々は美保関隕石に関わった団体としては異例の素人集団であったため「出すぎたまねをしている。」等の批判もあり、その中で事の大きさに戸惑いました。

これに対して我々の出した答えは「アマチュアの分相応に徹する事」でした。考えてみれば我々はただの「同好会」です。会員は皆それぞれ仕事や学業を持っています。もちろん利益団体でもなければ、社会に何らの責任を負うべき団体では有りません。そんな我々が「遊び半分」で事態に関わるには事件が大きくなりすぎました。

本文の中で我々が初め隕石の出現に興奮していたのが、徐々に距離を取りはじめ、最後は他人事のような書き方をしたのはその為です。

これを無責任と思われるかも知れません。しかし我々は責任を取るべき立場には有りません。むしろ「責任を持って自分たちの事を無責任だと言い切る勇気」が早くから必要であったと考えます。

隕石に関しては各種公共団体、自治体が動き始めた時点で我々の様な素人集団の「役目」は終わっていると今にして思います。

松江天文同好会は今年春結成10年を迎えます。ハレー彗星の後、会員数は低迷し全国の他の同好会と同様に悩みも有りますが、会員が固定化する事でむしろ動きやすくなり色々な観測や観望をみんなで楽しんでいるところでした。そこへ

隕石騒動がそれこそ降って湧いたように起こりました。

この事件について考えることは数多く有りましたが「アマチュアの立場」について考えることが出来たのは大きな収穫でした。この考え方が正しいか誤っているか、それは読んだ皆さんの判断にお任せします。

それこそ我々は判断する立場にありませんから・・・

最後にこの騒動の最中、会員の皆様のご家庭（我が家を含め）に多大なるご迷惑をおかけしました事をお詫びします。

松江天文同好会

事務局 佐藤 寧志

〒690

島根県 松江市 石橋町 217番地

1-103